

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720066

研究課題名(和文) クリスチャン・マークレイ研究 サウンド・アートの系譜学

研究課題名(英文) Study on Christian Marclay: Genealogy of Sound Art

研究代表者

中川 克志 (NAKAGAWA, Katsushi)

横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：20464208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：クリスチャン・マークレイという個別作家研究を軸にサウンド・アートの系譜学を構築しようとした本研究は、(1)現代音楽研究：「現代音楽」のジャンル論、(2)サウンド・アート研究：サウンド・アートの分類学、(3)聴覚文化研究：音響メディア史との接続 という三種の種類の個別研究を展開することで、サウンド・アート研究における基本的な視点を確立し、さらなる個別的研究の必要性を強調し、音響メディア史と関連付けられたサウンド・アートの系譜学を生み出した。

研究成果の概要(英文)：By aiming to construct the genealogy of Sound Art through an examination of Christian Marclay, this study developed three different kinds of studies: (1)Study of contemporary music - as an autonomous genre; (2)Study of Sound Art - taxonomy of the works; (3)Auditory Cultural Studies - History of Sound Media. Finally, this study provided the basic framework of Sound Art Studies, emphasized the necessity of the more detailed particular example, and led to the genealogy of Sound Art associated with History of Sound Media.

研究分野：音響文化論、サウンド・アート研究

キーワード：サウンド・アート 現代美術 現代音楽 実験音楽 音響文化論 聴覚文化論

1. 研究開始当初の背景

クリスチャン・マークレイという個別作家研究を軸にサウンド・アートの系譜学を構築せんとする本研究の背景は、3つある。本研究の個別対象としてのクリスチャン・マークレイに関するモノグラフ等が整備されつつあったこと、サウンド・アート研究が盛んに行われるようになっていたこと、その隆盛と並行して21世紀以降「聴覚文化研究」と呼べるような潮流が勃興しつつあったこと、である。

(1) クリスチャン・マークレイ研究

すでにマークレイに関する基本的データは整備されていた (Marclay, Christian, Russell Ferguson, and Miwon Kwon. 2003. *Christian Marclay*. Los Angeles, CA: Steidl / UCLA Hammer Museum. や González, Jennifer, Kim Gordon, and Matthew Higgs. 2005. *Christian Marclay*. London: Phaidon. など)。しかしこれらの研究では、音楽家としてのマークレイ像と美術家としてのマークレイ像が分断していた。ケージ的な実験音楽と音楽家マークレイとの「差異」に着目することで美術家としてのマークレイ像を分析すると同時に、ケージ的な実験音楽との歴史的な連続性を解明することで音楽家としてのマークレイ像を分析し、そのふたつのマークレイ像の分析に基づき、統一的なマークレイ像を提出することが必要な状況だった。

(2) サウンド・アート研究

「サウンド・アート」と呼ばれるジャンルが美術館やギャラリーなど現代美術の世界で注目されるようになったのは1980年前後である。このジャンルに対する学問的考察は1990年代になってから行われるようになった。ダン・ランダーらによるサウンド・アーティストの文章を集めたアンソロジー (Lander, Dan and Micah Lexier, eds. 1990. *Sound by Artists*. Banff, Toronto: Art Metropole and Walter Phillips Gallery. など) が登場した後、ダグラス・カーンらによる先駆的業績 (Kahn, Douglas. 1999. *Noise, water, meat: a history of sound in the arts*. Cambridge, Mass: MIT. など) が続き、その後、本研究が計画されるまでの10年ほどの間に、ブランドン・ラベルやカレブ・ケリー (LaBelle, Brandon. 2006. *Background noise: perspectives on sound art*. New York: Continuum. や Kelly, Caleb. 2009. *Cracked Media: The Sound of Malfunction*. MA: The MIT Press.) あるいはセス・キム = コーエンやサロメ・ヴォーゲリン (Kim-Cohen-Seth. 2009. *In the blink of an ear: toward a non-cochlear sonic art*. New York: Continuum. や Voegelin, Salomé. 2010. *Listening to noise and silence: towards a philosophy of sound art*. New

York: Continuum.) といった論者が各々の立場からサウンド・アートに関する充実した理論的考察を発表しはじめていた。日本にもアラン・リクトの著作の邦訳 (Licht, Alan. 2007. *Sound art: beyond music, between categories*. New York, N.Y.: Rizzoli International Publications. = アラン・リクト 2010 『SOUND ART 音楽の向こう側、耳と目の間』 荏開津広、西原尚 (訳) 木幡和枝 (監訳) 東京: フィルムアート社。) が紹介された。

本研究は、これらのサウンド・アート研究において不十分と思われるジャンル論——歴史と定義の研究——を補完するために構想された。そのための個別事例として、音楽と美術というジャンルを越境した活動を行うクリスチャン・マークレイを選択した。

(3) 聴覚文化研究

21世紀以降、聴覚文化研究と呼ばれる領域が登場した。実際にはそれ以前から行われてきた研究をも包含する領域だが、現象的には、感性論のひとつとして21世紀初頭に登場した「聴覚文化研究」を名乗る論集 (Bull, Michael, and Less Back, eds. 2003. *The Auditory Culture Reader*. Oxford: Berg. や Cox, Christoph, and Daniel Warner, ed. 2004. *Audio culture: readings in modern music*. New York: Continuum. など) や、ジョナサン・スターン 『聞こえくる過去』 (Sterne, Jonathan. 2003. *The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction*. Durham: Duke University Press.) に牽引されて生じた新しい学際領域であるといえよう。この領域では、それまであまり光を当てられてこなかった対象を、音や聴覚に焦点をおいたやり方で分析することが行われた。1990年代に始まり2000年代に盛んになってきた「サウンド・アート」研究の隆盛は、21世紀以降のこの聴覚文化研究の勃興と相互関係のなかで生じたと考えるべきである。こうした状況を踏まえれば、マークレイ研究を、聴覚文化研究の成果を十分に取り入れたうえで行うことが必要とされていた。

2. 研究の目的

本研究の目的はサウンド・アートの系譜学を構築することである。そのための個別事例として、クリスチャン・マークレイに注目し、その活動とその文脈を考察する。上記の研究背景をふまれば、本研究の目的は次のように分解される。つまり、音楽家としてのマークレイと美術家としてのマークレイに分裂していたマークレイ像を統一すること、サウンド・アート研究におけるジャンル論——サウンド・アートの歴史と定義に関する研究——を補完すること、聴覚文化研究の成果をサ

サウンド・アート研究を行うこと、である。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究は三つの領域からサウンド・アートにアプローチする個別研究として計画された。それぞれ、現代音楽研究、サウンド・アート研究、聴覚文化研究である。

(1) 現代音楽研究：「現代音楽」のジャンル論

音楽家としてのマークレイと美術家としてのマークレイに分裂していたマークレイ像を統一するために、そもそも「現代音楽」というジャンル論との関係性からサウンド・アートについて論じる可能性を探求することにした。

(2) サウンド・アート研究：サウンド・アートの分類学

サウンド・アート全般を考察してその内部にマークレイを位置づけるために、サウンド・アートとされる作品の分類学を試みた。

(3) 聴覚文化研究：音響メディア史との接続

聴覚文化研究のなかでも音響メディア史の知見を活用してサウンド・アートにアプローチするために、音響再生産技術の展開とサウンド・アートの系譜学とを関連付ける考察を発表した。

以上はそれぞれがサウンド・アートの系譜学に資するよう計画されており、何らかの理由で個別研究のどれかがうまくいかない場合でも、必ず「サウンド・アートの系譜学」に資するものとしてモジュール化されていた。

4. 研究成果

(1) 現代音楽研究：「現代音楽」のジャンル論

「現代音楽」というジャンル論を展開するために「現代音楽」というジャンルの自律性（あるいは自閉性）を指摘し（雑誌論文 ）、また、2011年にともに生誕100年をむかえたジャクソン/ポロックとジョン・ケージを比較することで現代音楽と現代美術との関連性（両者の間には必然的に単純な関連性を想定しがたいこと）について考察した（学会発表、雑誌論文）。

この結果、サウンド・アートというジャンル論を展開するうえで、必ずしも現代音楽研究からアプローチすることが実りある成果をもたらすわけではなさそうなことが明らかになった。

それゆえ平成24年度と25年度の実施状況

報告書では達成度を「(3) やや遅れている」と報告せざるをえなかったが、その代わり、現代音楽研究という領域（と以下のふたつの領域）で予備考察と事例調査を怠らなかつたおかげで、本研究の基本的な視点を確立することができた。

(2) サウンド・アート研究：サウンド・アートの分類学

サウンド・アートの全体像を検討してその内部にマークレイを位置づけるために、平成25年度の触覚美学研究会における「音と触覚サウンド・アートの場合」という発表（学会発表）において、サウンド・アートとされる作品群の分類学を提案した。もちろんここではマークレイについても考察した。

この研究発表を通じて、これまでのサウンド・アート研究にはジャンル全般にわたる作品の分類学が欠けており、ジャンル論を展開するためにはより詳細で具体的な実証的調査が必要であると判断するに至り、そのための実証的調査を蓄積することになった（雑誌論文、 ）。

それゆえ、研究代表者として基盤C「日本におけるサウンド・アートの成立過程の調査」（課題番号：15K02101、研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日）という研究計画を構想し、した。科学研究費の競争的資金を獲得するに至った。つまり、マークレイを事例とするサウンド・アート研究は本研究の問題設定を見直させることとなり、より具体的な実証的な日本におけるサウンド・アートの成立過程の調査へと発展することとなった。

(3) 聴覚文化研究：音響メディア史との接続

そもそも私は、聴覚文化研究の一環として音響メディア史研究をすすめていた。図書はその成果のひとつである。また、本研究と並行して私は、Sterne, Jonathan. 2003. The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction. Durham: Duke University Press. の共訳と、19世紀後半以降の音響メディア史について日本語で読める唯一の概説書である共著（図書）を準備していた。この共著は音響メディア史を文化論的観点から扱ったという点で日本唯一の音響メディア史の概説書である。

最終年度に私は、この共著の最終章（「15章 音響メディアの使い方 レコードの場合」）において、音響メディア史の知見を活用しつつサウンド・アートの史的展開を探り、クリスチャン・マークレイを「音響メディアを利用するサウンド・アートの系譜」のなかに位置づける論考を発表した。これが直接的には本科研の最終的な研究成果だと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

金子智太郎(東京芸術大学助教) + 中川克志
(横浜国立大学准教授) 近刊 「日本におけるサウンド・アートの展開 スタジオ200における脱ジャンルとサウンド・アート」 『京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS』7。(査読無し)

中川克志 2015 「松本秋則作品分類試論 「松本秋則~Bamboo Phonon Garden~」をめぐって」 横浜国立大学都市イノベーション研究院(編) 『常盤台人間文化論叢』1: 92-102。(査読無し)

中川克志(横浜国立大学准教授) + 金子智太郎(東京芸術大学助教) 2014 「[調査報告] 日本におけるサウンド・アートの展開 80年代後半の「サウンド・アート」の展覧会をめぐって」 『京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS』6: 66-73。(査読無し)

金子智太郎(東京芸術大学助手) + 中川克志
(横浜国立大学准教授) 2013 「[調査報告] 日本におけるサウンド・アートの展開 『Sound Garden』展(1987-94)の成り立ちをたどる」 『京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS』5(2013年3月):44-52。(査読無し)

中川克志 2012 「ケージとポロック 絵画の音楽化? 音楽の絵画化?」 『アルテス』4: 117-122。(査読無し)

中川克志 2012 「現代音楽の「現代」ってなに?」 『春秋』543(2012年11月号): 5-8。(査読無し)

[学会発表](計 2件)

:2013年11月17日(日) 中川克志
触覚美学研究会(日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) 「触譜を用いた触覚の実験美学的研究」(課題番号 24520106)講演会)にて研究報告(会場:東京八重洲ホール514会議室)
題目「音と触覚ーサウンド・アートの場合」

:2012年10月14日(日) 中川克志
日本アメリカ文学会(名古屋大学)
シンポジウム「音楽を通して読む<前衛>のアメリカ」
「ケージとポロック:メディアの可塑性」

[図書](計 2件)

谷口文和・中川克志・福田裕大 2015 『音響メディア史』 京都:ナカニシヤ出版。
(担当は5,6,10,12,13,15章)
:音響メディア史を文化論的観点から扱ったという点で日本で唯一の概説書
:「15章 音響メディアの使い方 レコードの場合」は、音響メディア論から得た知見を活かしてサウンド・アートの史的展開を探る「サウンド・アートの系譜学」であり、そこでクリスチャン・マークレイについて論じた。

山野英嗣(編) 2013 『東西文化の磁場 日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』 東京:国書刊行会。(中川克志 2013 「大正期日本における蓄音機の教育的利用の事例 雑誌『音楽と蓄音機』と日本教育蓄音機協会の場合」): 283-308)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川克志 (Nakagawa Katsushi)
横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授
研究者番号:20464208

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：